

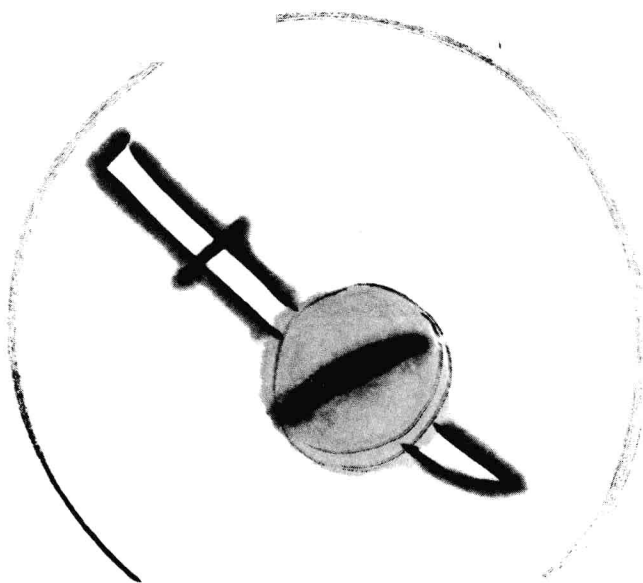
塚原卜伝 (続)

中山義秀



塚原卜伝 (続)

中山義秀



講談社

塚原ト伝(続)

昭和31年12月10日 第1刷発行 © ¥ 250

著 者 中 山 義 秀

東京都文京区音羽町3-19

発 行 者 野 間 省 一

東京都港区赤坂溜池5

印 刷 所 株式会社 技 報 堂

代表者 大 沼 正 吉

発行所 東京都文京区 株式会社 大日本雄弁会講談社
音羽町3-19

落丁本・乱丁本はお取りかえいたします。 (大進堂製本)

目次

一の太刀	稲妻	鹿島立	両雄	情焰	再会	能登守	秋風の記憶	女難	蕾の花	明暗
：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：
：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：
：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：
：	：	：	：	：	：	：	：	：	：	：
五	元	三	六	一七	一三	一五	一八	二六	三三	三五

裴
幀
杉
本
健
吉

塚
原
卜
伝
(続)

一の太刀

一

鹿島神宮境内の東、三町ばかりの所に、清泉が地下より湧出している。

昼夜湧きだす水量、二千四、五百石。こんこんと溢れ流れて、尽きることがない。

泉の水は、石畳みの池に、たゞえられている。御手洗みたちといい、身を洗い浄める所である。池は神域をめぐり下つた、低みにある。鬱蒼とした大樹が、頭上を蔽うている。

東北方がわずかに開け、高天ヶ原の原野、鹿島灘につゞく。

その池のほとりで毎朝未明に、

「うおう、うおう」

という雄叫びの音がする。まるで怪獣でも咆哮しているような、巨大な声だ。

神域の深い闇をひきさき、巨樹の枝をゆするばかりに凄じい。

時刻が早いうえに、広い境内の樹林の奥にあるので、長い間誰も気づかなかつた。

「旦那、どうも妙な音が致します。要石かなめいしでも、唸りだしたんでしょか」

ある日、宮中に住んでいる松本備前守尚勝の下人が、主人に報告した。

「団之進、何じやい。どんな天変地異があるうと、まさか要石が、唸るということはあるまい」
「それでもあの辺りか、もつと下の方で、毎朝音がします」

「行つてみたのか」

「遠くから、聞きました」

団之進は海岸の方へ、見張りに出されていた。月夜や夜明けの海岸を、監視するためである。その往きにでも、聞きつけたのであらう。

「私は毎朝、かしこを通るのが、怖くてならねいから、旦那、どうか調べて下さい」

「其方は、見張役ではないか。そんなに臆病で、役が勤まるかい」

「それとこれとは、違います。得体の知れない物の見張は、私にできません」

松本が豪傑なのを頼りにして、家来も主人に甘えている。

「よいわい、明朝にも調べておこう」

松本はもう、五十の半ばをすぎている。鬢髪に霜をまじえてきた。

元氣はいいが、齢はかくせない。貫祿がずつとついてきたかわり、身体の動きが重くなつてきている。

彼は翌朝早く、宮中の屋敷を出た。宮中は、鹿島神域内である。庶民は住むことを、許されて

いなかつた。

松本をはじめ鹿島大掾家の四家老が、東の鹿島灘、西の北浦浜の大船津、南の長柄、その他方々へ見張や間諜を、出したり放つたりしているのは、主筋にあたる大掾義幹の来襲に備えるためである。

義幹の兄鹿島五郎左衛門景幹は、松本等四家老が反対したにもかかわらず、利根の対岸に三百の兵をだして、国司の木内と小見川の西南米野井で闘い、敗死してしまつた。

舎弟の義幹が、少年で後を嗣いだ。それをよいことに家臣達が、家政をいのように胡魔化して、主領や貢納品を横領してしまう。

義幹は成人の後、玉造源三という牢人を用いて、横取された領地をとりかえした上、家臣や領民の私領、屋敷に手を入れた。

それで四家老と義幹と喧嘩になり、四家老は縁族にあたる府中（石岡）の大掾家から、次男の通幹みちもとを先主の娘の婿にとつて、義幹を城から追出してしまつた。

義幹は東小次郎胤久の居城、東野城（笹川）に逃れて行つて、絶えず鹿島城の奪還をねらつてゐる。

二

四家老に計られて、城をだされた義幹は、憤怒のあまり、やけくそになつてゐた。

軍資金をあつめると云つて、利根川を上下する舟の貨物を奪い、家来は夜盗となつて旅人をお

びやかす。

対岸に舟をだして、鹿島領に乘込み、民家を襲うて財物を掠奪したり、放火したりして、厭がらせをやつた。

それで領民の信望と、同情をうしなつてしまつた。

松本は箱提灯をさげ、竹杖をもつて屋敷を出た。

竹杖は細竹を三つに割つて、中に筋金をはさみ込み、籐で巻いて漆を塗つた物である。これでひつばたかれたら、手足が折れてしまう。

彼は奥の院を通り抜けて、樹林の中に入つた。若葉が青葉にかわる季節である。

そのため林の中の闇は、いよいよ濃く、深闇として何の物音もしない。

右へ行けば、要石、まっすぐ坂を下れば、御手洗の池。

どつちへ行こうかと、しばしためらつて、闇に佇んでいると、不意にピリピリと、五体にこたえて来るものがあつた。

闇の奥で、何かパツと燃えあがり、それと同時に空をつく巨木の一つが、梢から根元まで真つ二つに割れて、左右の闇に音もなく、吸いこまれていったような感じである。

「あつ」

松本は我知らず、わなわなと激しく顫えだして、

「やつたな」

それは一種の靈感と、云うようなものであろうか。

一度深く、体験した者でなければ解らぬ、神変不可思議な共感のひらめきである。

松本はあわてて、まづ直に坂を下りだした。女子供ならば、こけつまろびつするであろう所を、どんなにあわてても、流石に躓かない。

池のほとりに下りたら提灯をかゝげて四辺の様子を窺つたが、何の異変もない。

地下の奥から音もたてずに流れだす、清泉の水をたゝえて、池の面はひつそりと静まりかえつてゐる。

池のふちをとみこうみ、辿つて行くと、池のはずれを少しあがつた所に、注連繩しめなわをまわした大杉の神木が立っている。

「あゝ、これだ。これが今、二つに中から裂けた」

松本は大杉を見上げたが、神木にもとより何の異状もある筈はなかつた。

雷火にうたれたにしろ、この大樹が二つに割れることなどあり得ない。

神木の蔭に、倒れている人があつた。水に濡れた、裾短な白衣を着て、手に木刀を握つてゐる。精根を一撃につかいはたして、そのまゝ倒れてしまつたらしく、昏倒して夢うつゝの境にあるようである。

げつそりとこけた頬に、鬚がいちめんに生えのび、相好もわからないくらいだつた。

松本は驚いた様子もなく、黙つてその人を見おろしている。もう何処にも、あわてた風はない。見ている間に、彼の両眼から、涙がながれ落ちてきた。

両頬に筋をひいては落ち、筋をひいては落ち、とめどなく滴り続いている。

松本はなぜか、倒れている人をそのまゝにして、又闇の中を帰つて行つた。

やがて、闇がうすれてきた。森の中で、小鳥の囀りがはじまる。かなたの社殿の方から、はるかに鴉の聲が聞えてくる。

東の原野の上に、きらりと輝いた一筋の光が、みるみる幾千万の矢となつて、樹海の梢に飛んでくる。

倒れている人の鬚におゝわれた顔は、蒼白といつてもよいほどだ。

しかし、病人の顔色ではない。すがすがしいばかり、冴え澄んでいる。よほど楽しい夢を、見ているらしい。

彼は気がついたようだ。身体がすこし、動きかけたと見るまに、がばと飛び起きた。

塚原新右衛門である。今まで前後をおぼえず、倒れ臥していたことが、わからない様子である。木刀を右手に握つたなり、眼前にそびえたつている神木の大樹を、空をつく梢の方まで、何気なく見上げてゆきながら、急に愕然としたらしく、一步後にさがつた。

「これが豎割、真つ二つに斬れた——」

そんな事を、つぶやいている。まだ夢うつつの境を、さまようているのかも知れない。

「そうだ、たしかに斬れている」
彼は木刀を取直すと、もろ手に握つて、静に頭上にふりかぶる。

びたりと振りかぶつた瞬間、彼の体勢は無念無想、一個の塑像となつた。

斬つて切れず、突いて倒れぬ、磐石不動の体勢。眼前にそびえはだかる、千古の神木を圧するばかりの大きさが感じられる。

「これが、神伝の一の太刀。嗚呼、我遂にこれをえたり矣」

彼のやつれた蒼顔に、歓喜の光がさしてくる。ついで白衣の全身が、黄金の光につつまれてしまつた。陽が海上に、昇つたからである。

彼の肉体はひどく疲れている風であつたが、精神はしつかりとした自信に燃えていた。まるで、新しく生れ出た人のように、他人のもたぬ沈静な趣を身につけている。

塚原は御手洗の清水で、口をすゞぎ顔を洗うと、坂をのぼつて神社の境内へ入り、社殿の前にぬかずいて、かなり長い黙禱をつゞけていた。

千日の行ぎようといえ、約三年間である。春夏秋冬、雨の日、風之夜、雪の朝、一日も怠りなく勤めるというのは、容易なことではない。

千年余前に、鹿島の太刀を興した劍祖、国摩真人くになま びとは、鹿島の高天ヶ原に神壇をきずいて、百日の間祈願をこめ、神託によつて「一の太刀」の秘伝を悟り、名づけて神妙劍とした。

妙とはわかき女の乱れ髪、結うにゆわれず、とくに解かれずの意である。

千年以前の鹿島は、蝦夷征討の城砦であり、軍団の駐在所だつた。その伝統からして、武技の興るのは当然というよりは、必然と云つたほうがよい。

国摩真人は鹿島の大行事であり、軍団の統括者である。「鹿島の太刀」はこの統括者によつて代

表された、刺撃の武技だつたに相違ない。軍団の兵士は、鹿島の神奴であつて、後に神人と云われるようになったもの。

その長である神職達が、真人の「一の太刀」を代々うけ継いできたわけだが、彼の神妙剣は、行と悟りによらなければ解らない。

たとい解つても、人によつて神妙に差がある。松本が木剣を握つて倒れている、塚原を見て涙したのは、はたしてどんな意だつたのか。

四

塚原の道場は、塚原にはなく、鹿島の宮中にあつた。

塚原の兄卜部常賢、別名吉川威伯の道場であり、また鹿島神人達の道場でもあつた。

道場はこの当時盛んだつた。一向宗徒の集会所、発展して寺ともなり城砦ともなつたものを、道場とよんだように、物事をまなび究める所である。

正面に神壇をきずき、鏡、櫛をかざつて瓶子、供物をそなえ、摩利支天をまつることもある。大変神聖に、とりあつかつたものだ。

塚原はこの道場についている、家屋に起居しながら千日の行をつんだ。劍祖の真人が百日ならば、自分は千日やるという、勇猛心をおこした。

「うおう、うおう」

という雄叫びの声は、彼の勇猛心がついに彼の血肉化し、精霊となつて、云わざるに云い、声

となり叫びとなつて、松本の下人の耳を、驚かしたものであらう。

行を終えた塚原は、休養のために、塚原村の養家へかえつた。

塚原は鹿島から北、約一里。鹿島城の前の坂を、田野の方へ下つてゆく。

塚原は南がひらけて、北浦にのぞみ、後の三方を緑丘で囲まれた、明るくてのどかな平和境である。

土地は肥えていて、浦から魚獲があり、風光がよく、気候も悪くはない。

新右衛門の館は、西の丘の麓にあつた。東の麓に禪寺があつた。館と寺の間は一、二町ばかりで、寺は屋敷の中にあるようなものだ。

前は浦辺まで、広々とした稲田。新右衛門の養家の所領である。民家は東、西の丘のきわや、浦辺に点在している。

屋敷は、二重になつている。石垣や土塀で囲まれた、前の区域には、家人や下人の住居、納屋、米倉、厩などがある。

奥はやはり石垣、土塀で仕切られてあつて、土地は一段と高い。

裏は丘の中腹をいっぱいに蔽う竹藪、矢種、竹槍の具となるものであり、万一の場合は中にもんで敵を撃ち、丘の頂にたてこもつて、敵をふせぐ。

頂には空隍(うらぐう)をほり、土塁をめぐらして、その備えがしてあつた。

しかし、この平和境に、その必要はまずなかつた。屋敷内には、田畑の耕作や山仕事にはたらく男女の下人達と、それ等を取締る下司(げす)の家人(けにん)、あわせて三十人ばかりが住んでいた。

それに領内の地侍を集めても、百人にはなるまい。その程度の土豪であり、城主である。

たゞ戦がないのと、海陸の物産が豊なので、塚原の養家は富んでいた。

新右衛門が一生、武術修業をつゞけても、困らないだけの余裕がある。

屋敷は母家おもやと隠宅と、二棟に分れている。

母家には、土佐守新左衛門安重夫妻が住んでいる。もう七十を越える老翁だ。武芸できたえた兵法家らしく、肩幅がひろく身体つきが頑丈で、長い白髯をたくわえていた。

新右衛門がまだ独身で、しかも旅に歩いたり、実家の道場に泊り詰めていたりするものだから、同族の五左衛門方から少年を貰うけ、準養子格にして育てている。

それは、新右衛門の希望でもあつた。彼は兵法に一生をさゞげて、塚原の領主になろうという意志はない。それに彼の妻となる筈であつた、新左衛門の一人娘は、まだ結婚しないうちに病死してしまつた。

五

隠宅の自室へ帰つてきた塚原は、髭を剃り髪を結いとゝのえた。

十六、七ばかりの少女が、まめまめしくかすずいて、彼の身の廻りの世話をする。

衣服をあらためた塚原が、

「これ、お久」

「はい」